

特別 対談

JA通信 Public Relations Magazine



JA秋田ふるさと、新たな期待を創造します。

別冊

平成30年12月25日発行

JA秋田ふるさと

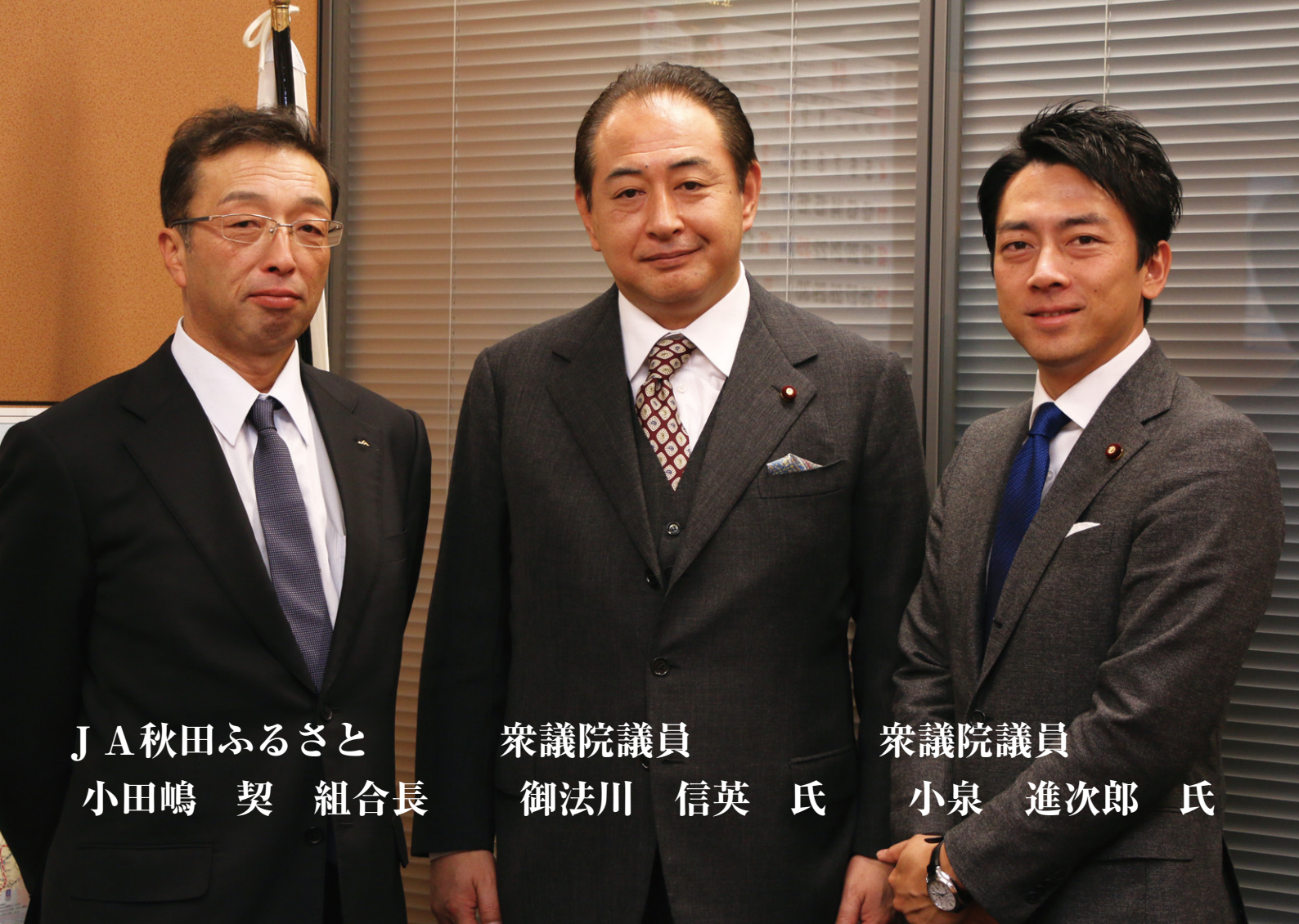
小泉

進次郎

×

小田嶋

契



J A 秋田ふるさと
小田嶋 契 組合長

衆議院議員
御法川 信英 氏

衆議院議員
小泉 進次郎 氏

平成30年11月26日！。

平成最後のこの年に、まさかの対談が実現しました。

衆議院議員小泉進次郎氏と、秋田ふるさと農業協同組合小田嶋契組合長が、農業を取り巻く様々な話題を語り尽くします。同じく衆議院議員の御法川信英氏には、二人の架け橋役として参加していただきました。

この対談を余すところなく、皆さまへお届けします。

噂の2人、対面

小田嶋 いろんな人に小泉先生は農協の天敵で、農協の最終兵器が俺だと思われている。水と油のようにならぬに絶対合わねえだろうと思われている。

御法川・小泉 あっはっはっはっはっ！

小泉 これから誌面企画やるでしょう。そしたらね、「激突対談」とか見出しを付けたら面白いよね。

御法川 スタートはね。

小泉 「ええ！この二人が対決なの？激突なの？」といった形でこの対談が実現しましたと。仲裁は御法川先生が行います、みたいな。

小泉 今日はこの対談を通して組合員の皆さんに何を一番伝えたいですか。

小田嶋 組合員は俺が先走って訳の分からないことをやっているんじゃないかと心配している。うちの組合でやっていることはちゃんと全うなことだと伝えたい。

小泉 うちの変わり者組合長大丈夫かよ、という状況なんですね(笑)。それを僕と御法川先生が「大丈夫です！」と太鼓判を押す。それを、このJAの広報を使ってやると。一番シンプルでいいじゃないですか。

生産調整を振り返る

小泉 組合長が組合員との意識がずれていると思うことはありますか。

小田嶋 ずれているということではないが、5年前、生産調整を廃

止すると決まった時、これって「大変だよな」と青くなつた。その当時は「減反をやるから米の値段が維持されている」という話をずっと信じ込んでいた。だが、減反が始まる前の著書や写真などを見てみると、今よりもすごく大変な仕事をしていたはずなのに、皆樂しそうに仕事をしている様子がうかがえた。それはなぜかと考えると、農家は戦後初めて自分の田んぼを持った。

小泉 農地解放ですね。

小田嶋 自分の田んぼを持って、一粒でも多く収穫すれば豊かになると実感し始めたあたり。

小泉 そりゃあ、前向きだ！

小田嶋 一粒でも多く採れば自分の所得になるんだもの。

小泉 意欲が喚起されたんですね。

小田嶋 そう。意欲が喚起されて生産性が上がっていったら、昭和45年に自分の田んぼが自由に使えるようになった。

小泉 それが減反なんですね。

小田嶋 減反で自分の所有している田んぼを国が利用制限してしまった。

御法川 そういうことだな。

小田嶋 当時米は政府が全量買い上げしていたから、買い上げの数量に制限をかけられて、農家はみんな減反政策に反対した。ところが40年以上したら当時反対していた人たちが減反政策廃止に反対した。

小泉 続くとね、それが常態化しちゃうんですよね。

小田嶋 これってどこがおかしいなど感じて。確かに、一時的には

正しかったのかもしれないけれど。

この政策によってずっと米の値段が恒常化したというのは本当なのか調べた。米の値段は平成5年をピークに下がっているが、昭和45年の100円は今の360円と同じくらいの価値がある。それに換算すると、米の値段は減反が始まってからずっと下がり続けていることがわかった。昭和40年代にみんなが出稼ぎに行ったり、兼業農家になったりしたのは米の値段が上がっても実際の所得が上がらなくなったから。だとすると、米の値段を下げないために減反するというのは間違っている、と。俺が20代で農業をやっていた時、米が余っているから減反政策で生産を抑制しなければならぬという考えを皆が共有していると思っていた。ところが稲刈りの時、コンバインに落ちていた^{もみ}籾を手で払って地面に落としたり、普段は温厚な親父が、手に持っていた鎌を下ろして「百姓は一粒でも多く採りたいんだ。そのために頑張ってい



るんだ。米をこんな粗末にしてどういうことだ！」と言って俺を殴った。ただ、当時の俺の感覚では、国が作るなど言っているのだからしょうがないじゃないか、と。

小泉 「そもそも減反じゃねえか」と。

小田嶋 その時は親父が怒る意味がわからなかったけれど、今にして思えば、減反で何がダメになったのかというと、単位面積あたりどれくらい収量上げられるか、というような生産技術や意欲、モラルが失われていった。

小泉 今おっしゃられた言葉はとても大切な事ですね。僕らの世代は減反の佳境、一番の時代を知らない。だけど、僕も以前農林部会長をやらせてもらっていた時に、

農業には何でこんなに経営感覚が根付かないのだろうと感じた。それに、日本の農業の常識は、米が売れない、消費が伸びない、値段が高くならない、といったときに「国でなんとかしてくれ」と訴えてくる。もちろん食は守らなければいけない。しかし、農業以外の他の業界で、売れなくなったから補助金で補ってんしてくれという業界が一体どこにあるのかと。まずは、いかに儲けるかという農家の意欲が無ければ産業として成り立たないよ、と言ってきた。ただ、改めて組合長の話を聞くと、経営感覚を失わせたのも国の責任だね。

御法川 そりゃそうだね。

小田嶋 ただ、国だけの問題なのか、とも思っている。全中にも責

任の一端はあるんじゃないか、とか。もともと、経営感覚を持つ前に、物を作っていく以上は生産効率を上げることは当然の事。

御法川 当然だよな。

小田嶋 ところがどうも全中はそれをやらせてこなかった。

御法川 効率化を進めるっていう農家の生産意欲向上に働きかける施策が全く無かったもんな。

小泉 減反とともに政官業のトライアングルで皆が握手してきたでしょう。

農林部会長のとき、西川公也先生（元農林水産大臣）に「この20年間の農家の皆さんの所得、農業生産額は右肩下がり。農業者の平均年齢は68才。米農家は70才。つまり若者が参入しない。これはなぜこのような状況になってしまったのですか」と尋ねたところ、先生から「小泉さんのおっしゃる

通りでね、原因は3つあるんだよ」と。「1つ目。族議員が悪い」と。「2つ目はね、農水省が悪い。そして3つ目。業界団体が悪い。原因はこの三者だよ」と。先生ご自身がおっしゃいましたよ。

小田嶋 手を握るのは大事なんだけど、三者で手の握り方が間違っていたんじゃないかな。得をしたのが多分別の人たちだった。農業者というよりも別の団体が維持されるとか。

御法川 そういうことだね。

小泉 そうですよな。

小田嶋 今の生産調整の話でも、全中が主導して統制かけていかなくてはいけないと全中を含めいろいろなところで思っているらしいけど、その方がはるかに問題だと思っている。ある組合長は会議に行ったときに「おまえの所だけ作付面積伸ばして」と言われたりするのが嫌らしい。農家の意識の根

幹にはできる限り作りたいたいというものがある。その気持ちを押しさえなきやいけない理由は無いはずだ。「政府備蓄米を含めてきちんと売り先はあるよ。安心して作ってくださいよ」と言えばいいのにと思う。全国でルールを決めてやるうとして、農家からすればあまりありがたい話ではない。

小泉 団体行動で言うのと、赤信号皆で渡れば怖くない、みたいな。一人だけ責められるのが嫌だから。

御法川 平成が始まる頃にカレン・ヴァン・ウォルフレンが「日本権力構造の謎」という大著を書いた。その中に「本質的に日本は、誰が責任を取るのかが明確になっていない国だ」と。何処に行ってもそれなんだという話だった。その中に農協も出てくる。

小田嶋 俺も経済学の本を読んだのか、あれだけ優秀な官僚組織で、日本陸軍の失敗がなぜ起こったのか、あれだけ優秀な官僚組織

なのに、戦争に突っ走ったのかを見た、個々に合理的な判断を積み重ねていったが、最終的にこれはダメだと思ったときに「全てを埋没コストにする」と決断する人が誰もいなかったということだった。多分農業でもいろんな取り組みがあつて、いろんな論争があつたように見えるけど実は明治から同じことを繰り返している。

御法川 なるほどね。

小田嶋 大規模農業と小規模農業どっちがいいんだと。地主が小規模農業の方が良いんだと言っている、戦後の農協も同じことを言っている。だが基本的に効率的にものを作るのに規模の大小は関係ないはずだ。お年寄りの農家だつて効率よく作るに越したことはない。稲作農家にも兼業や複合経営をしている人たちがいる。

小泉 だけど、規模が効率性に直結することもあるから、そこは

ある程度規模を作らないと。

小田嶋 今までの減反政策が行われてきた環境では10分くらいで規模拡大のメリットが出にくくなってくる。なぜならば他の作物を作らなければならなかったから。稲作専業になかなかなれないから作業効率が悪くなるし、反収をどれだけ上げられるかという感覚が大規模農家には全く無くなつていて、規模が大きければ大きいほど反収が少なくて当たり前だと思つてしまつている。それこそが一番改善しなければいけないところだよ。規模が大きければ大きいほど適正な作型を追求しなければ、経済効率は発揮できないはずだ。規模が大きいから反収が少なくてもしようがないんだという意識が稲作農業の効率を落としている。

御法川 なるほどな。

※1 埋没コスト
埋没費用、サンクコストとも。すでに支出され、どのような意思決定をしても回収できない費用の事。それまでに費やした資金や労力、時間を惜しんで事業を継続すると損失が拡大する恐れがあることから、意思決定に際して埋没コストは無視することが合理的とされる。

1 農協に向けた提言

小泉 今度秋田は農協を1つにするんですって？

小田嶋 いやいや、まだ。「1農協を目指す」と決まつただけで。

小泉 小田嶋組合長が県内1農協にするためには「これをやらなきゃだめだ！」というのを浮き彫りにしたらいじゃないですか。多様な意見を出し合つて、質の高い議論を重ねたらいいと思う。

御法川 それはいいね。

小田嶋 目指すべき最大公約数は各地域によって全部違う。これだけは秋田県の共通の課題なんだと

いうことを浮き彫りにしないと1農協に再編する大義すらない。

御法川 なるほどね。

小田嶋 そもそも大きくして何をやるんだと。例えば「秋田を日本一の米の産地にします！」という宣言でもしてやるのだったら分かる。農協が何をやらなければいけないのかという根幹がしっかりあれば、生産振興を一生懸命やるために組織の形を変えますというのであれば理解できる。だが総合農協をただ大きくして、その形を維持しなければならぬという意味がよくわからない。「総合農協でなければ農協でない」、「農協が生き残れない」という理論は理解できない。

御法川 確かにかなり無理がある理論だよな。

小泉 至極全うですよな。

小田嶋 大きくして残れるんだっ

たらいいよ。でも弱ったところが集まって、ただそのままの形を維持したって意味がない。

小泉 シンプルに言えば儲かればいいんですよ。

小田嶋 儲かれば、となったときに基本的な柱はなんだと。人によつていろいろな考えはあると思うが、俺は稲作と果樹だと思う。果樹は地域の居住空間の端を維持している。果樹園が荒れると間違いなく地域が荒れる。ところが秋田県は果樹を作れない産地ではないが、大産地に引け目を感じている。

これからは果樹も

小泉 秋田の果樹といえばなんですか。

小田嶋 代表的なのはりんご。

小泉 秋田はりんごのイメージ

が無いですよな。

小田嶋 県内で果樹が盛んな地域は局地的なんだよ。

御法川 秋田のさくらんぼ、来年6月だけだね、ご賞味ください。

小泉 秋田にさくらんぼあるんですか？隣の山形の方がさくらんぼのイメージが大きいですが。

御法川 秋田のさくらんぼは美味しいよ。

小泉 やつぱり秋田のイメージは米じゃないですか！

御法川 そうだよな。やつぱり米なんだよな。

小泉 このテーマ良いと思いますよ！「秋田のこれからは米だけでなく果樹もいく」と。さくらんぼは付加価値が付くから高く売れるんじゃないですか？まずは知名度ですよ。まず秋田が「果樹をやっている」という事を、おそらく他地域の人たちは知らないんですよ。知ってもらって大事なので、まず知ってもらうためには来年の初セリで秋田のさくらんぼに一番の値が付いたというようなことで1回ニュースになるじゃないですか。

小田嶋 今の所さくらんぼはほとんど贈答用で終わっちゃう。

小泉 つまり供給量が少ない？

小田嶋 少ない。販売金額で3800万円ほど。

御法川 秋田の果樹以外の園芸もそうだけど、お米以外の話をする。一番の問題はロットなんだよな。

小泉 だとしたら逆に、超プレミアを付けてみたらどうですか。

御法川 そうだよな。

小泉 これは普段秋田県内以外

には出回っていないけども、毎年このロットだけ首都圏に出しますということにして、一粒千円。それで桐の箱に入れて、その超付加価値を付けたものは、秋田産です。佐藤錦を超えた、秋田錦ですとか、そういう取り組みをやって、「秋田にさくらんぼってあるんだね、しかも超高いらしいよ」と。

小田嶋 前に考えたことがあって、やろうとしたんだけど、俺の考えたことだから、「小田嶋また始まった、また無茶な事言って」って言われてしまった。

小泉 高く値を付けるには、ストーリーも必要。

御法川 そうだね。

小泉 ストーリーが無いと、なぜこんな高いのかと消費者に思われてしまう。本当に高い付加価値を付けるには、生産段階でこう

いった手間をかけています。こう

いった愛情を持ってやっています。こういう歴史がこの作物にはあります。ということを含めて、しっかりとブランドディングをやって、そういう売り方をした方がいいと思う。

小田嶋 果物の大敵は、雪。雪から樹を守ったんですよというストーリー作りも可能。

御法川 秋田の冬は雪が多いでしょ。そうすると枝は折れるわ棚は崩れるわで大変なんですよ。

小泉 「落ちないりんご」という受験生に大人気のりんごもありますもんね。

御法川 そういうのをやってる所もあるよね。

小泉 あと今はあれですよ。フィギュアスケートのザギトワ選手。今ザギトワ＝秋田犬のイメージ

ジでしょ。やっぱり秋田犬だけじゃなく、農業の魅力もアピールしなきゃ。

御法川 今ネットで検索すると日本の地名で上位に来るのは東京の次に今は秋田が出てくる。2位になっている。

小泉 カーリング女子のもぐもぐタイム。あれで北海道のお菓子とかイチゴが人気になった。そういうのも大事。

御法川 やっぱり（プロ野球チーム日本ハムファイターズに入団が決まった）吉田輝星選手にもぐもぐタイムやつてもらわなきゃ。

小泉 それいい。日ハムの本拠地の北海道に持って行ったらいいんですよ。

御法川 つかいおにぎり食べてもらって。

小泉 梅干しだと思ったたらさくらんぼだったとかオチがあったりね。

小田嶋 もちろん園芸も進めているんだけど、今一番心配しているのが果樹なんだ。うちの農協では近くのスーパーでリンゴジュースを大量に売り出している。

小泉 僕もいただきましたよ。ストローを刺して飲むやつですよ。ね。

御法川 正直ストロー刺して飲むのはやっぱり大変だと思う。



小泉 確かに面倒ですよ。

御法川 やっぱりキャップにしてもらった方がいいなと思う。

小泉 でもアルミパックだとコストは安いですよ。

御法川 例えば年配の方があれを開けてね、ストローを刺して飲むとしたらこぼしちゃったとかね。そういうところを考えると工夫の余地があるのかなって。

小泉 僕は移動中に車の中で飲んでんですけど、パックだと車の中では置けないね。

御法川 そうなんだよね。今の流りはキャップのついた、飲み終わったら潰して捨てられるものか、後は飲みきりサイズ。

小泉 紙パックでもいいんじゃないですか？

御法川 今はもう大きいサイズじゃ買わないんだよね。

小泉 買わないですね。でもね、どうやっていこうかという時に組合の皆さんだけじゃなく、プロを呼ぶことです。外部から。秋田の人は自分たちの地のものを当たり前だと思っているから。

御法川 その通り。

小泉 外国人でもいいんですよ。とにかく秋田の事を知らない人に入ってもらって、純粹な目線で見てもらった時に、秋田のいい所と、これじゃ外の市場で売れないなっていう冷徹な目で見てくれる人が必要だから、3カ年計画でこれからやった方がいいですよ。

※2 ブランディング
ブランドを構築するための組織的かつ長期的な取り組みの事。

次の世代へつなぐ

小田嶋 農協組織全体の風土とし

て、他所からの目を極端に嫌うところがある。

小泉 いやあ、おっしゃるとおりですよ。

御法川 確かにそういうところもあるかもしれない。

小泉 だから僕が全農に外部人材を必ず登用してくれて言ったのは、外の目を入れたかったから。

小田嶋 私も農家の代表の役員だから、定義上は職員ではない。俺に口を挟まれると体質的に嫌がってしまうところがあるのは、俺が外の人間というのもあるのだろう。さっきジュースや果物の話をしたが、平成23年の雪害があったときに、果樹の収量が激減して、3分の1から4分の1くらいになってしまいい、市場にまともに出せなくなった。それでもなにか手を打たなくてはいけない。そうなったときに、雪害の助成として全農から300万円の補助がいただけると。

ならばその300万円で農産物を買い取れって言った。買い取って九州で売れって。九州ではうちで作っているような立派なリンゴを見たことが無いという話をどこかで耳にしていた。マーケットをそちらにするのもありだろうと。ただ、職員は生産者が猛反対するはずだという。

小泉 なんで反対するのかがわからないのですが。

小田嶋 生産者は、今までの市場に出したい。今までのお客さんを大事にしたいという考え方が浸透している。

御法川 すごく保守的なんだよね。
小泉 わかります。

小田嶋 ただ売ればいい。というわけではないんだよね。

小泉 けどね、生産者に言わなきゃいけないのは、売れなくて



もいっていうんだったら、売れない時に、「売れねえ」って言わないでくださいねっていうこと。問題は、「売れなくてもいい。そんな簡単もんじゃねえ」っていつている人に限って、やれ米の価格が低い時には「ふざけんな」って言うんだから。どっちなんですかと。

小田嶋 米と果物の生産者は考え方が違っていて、うちの場合、果物はロットが小さいので、基本的には個々の農家にお客さんが付いちちゃっている。「現状を打破しなければ」とは思っているけど、ま

ずは今いるお客さんに届けたいという考えが強い。逆に米の場合は値段が高くなければいけないというか、売り先そのものよりも値段に目先がいつてしまっている。米と果物ではその考え方に違いがある。

小泉 今購入して下さるお客さんに、自分が生きている限りお届けしてあげればそれでいいんだ。というご高齢の農家さんがいるのもわかりますし、その人たちはそれでいいと思う。だけど問題はこれから。若い人ですよ。今の固定客として付いている個別販売のお客様たちもだんだん高齢化してきていて、「今まで送ってきてもらっていたけれども、もう結構だよ」という瞬間が必ず来ますよね。そして、送ってきてもらっていたお客様の子どもたちも、継続して買ってくれるとは限らない。しかも、昔ほどフルーツを食べなくなってきていますから。

小田嶋 果物は今ギフトになってきている。家庭で消費しなくなってきた。

小泉 それを見据えたら、次の世代につながるということ、他のマーケットを見つけていかなければいけませんよってという話までやるのが若い人。それを開拓するのが農協なんだと。

小田嶋 俺が考えたのは、都会では生ごみが出るのを嫌う。包丁を使えない。ならばジュースで消費してもらおうと。それに合わせた栽培の方法や品種選定も必要になるだろう。

生産者の意識改革

御法川 改正入管法^{*3}では、外国人労働者の受け入れ拡大を農業分野にも想定している。やはり彼らを、ちゃんとした形で雇用して、これはっていうモデルになるような法人を秋田に作りたい。そこで作る

ものが何になるかはわからないけれど、そういうストーリーの作り方もしたいと思っている。

小泉 小田嶋さんだったらいいんじゃないですか？新しい事を抵抗なくやるタイプでしょうし。

小田嶋 んー・基本的に農業って個人でやるもの、職人の世界だと考えている。雇用のノウハウを持つていない人が多い。逆に雇用するためには何が必要か、どういうスキルが必要かというようなところをもうちょっと考えていかな

小泉 それ^{*4}がGAP^{*1}なんですよ。雇用マニュアルにもなりますし。

小田嶋 確かにGAP^{*1}はこれからの営農指導の根幹になっていくはずだ。実は失敗した農家の経営状況などを色々分析した結果、似たような傾向がいっぱい出てきた。25項目ほどの傾向がでてきて、実

はそれをひっくり返すとGAPになるということに気付いた。

小泉 それはいいじゃないですか。

小田嶋 JGAPやグローバルGAPなどさまざまなGAPがあるが、自分たちの産地に合わせた、GAPにこだわらない行動規範のようなものを作っていきたい。

小泉 都道府県の単位でもGAPはありますが。

小田嶋 どうもそれは簡便化しただけで、産地の実態や個々の状況にマッチングしているかというとしていないように感じている。ただ認証のハードルを下げているだけ。

小泉 問題は都道府県ごとにハードルを下げたGAPを取っていて、JGAPやグローバルGAPと同等だと勘違いされると困ると。

小田嶋 そう。

小泉 アジアGAPというものがあって。今までJGAPを普通に取ってきた人たちであれば普通に取れる。しかもそれがグローバルGAPと同等に認められるようになった。これは世界に出すときは大きいですよ。なのでこれから秋田でもアジアGAPを広めてもらいたい。

小田嶋 俺は最初からアジアGAPを目指すというよりも、基本的にGAPというものは行動規範だから、生産者にいかにモラルを定着させるかという方を優先したい。最終的にアジアGAPを目指した時に、生産者には「GAPってこういうことなんだな」って感じてもらうって到達できるのが理想。だからその前に、農業としての風土っていうものをきちんと整えていかないと。GAPを取ることだけを目標や目的にしてはいけない。

小泉 僕が農林部会長の時にやったのは、農業高校でGAPなんです。それが今だんだん全国に広がってきていて、同じ東北に学ぶのであれば、青森県の五所川原農林高校。ここはぶっちぎり。もうグローバルGAPを取得している。

小田嶋 りんごを輸出しているからね。

小泉 学生は中国へのりんごの輸出販売実習を毎年やっている。自分たちがグローバルGAPで作ったリングを売る。

小田嶋 輸出しているからGAPへの取り組みも早い。輸出をやらないと定着しない。

小泉 秋田から青森へ東北内留学をするのもいいんじゃないですか。それくらいその高校はすごい。

小田嶋 俺も青森のりんごは一番参考にしてる。一時、りんごなどの果物は生産調整しなければいけないような状態になった。だがその時りんごは生産調整をしなかった。「国内で余ったものは外国に売ればいいじゃないか」と取り組んだのが青森だった。GAPどうのこうのというのではなく、根本的な農業の姿勢でそうであるべきだと思う。国内で売り先が無いくらいに作ったら、外国に売ればいいんだ。と思えばいい。

小泉 出口まで考える農業ですよね。

小田嶋 そうしていけばGAPだろうがなんだろうが、ものづくりの考え方は世界基準とそんな色なくらいに生産者の意識がいくはずだと思う。

小泉 その通りだと思います。

小田嶋 減反政策の中で主食用米

を作付した田んぼが飼料用米になつたり政府備蓄米になつたりしてきたが、これを再度主食用米にすることで輸出が可能になる産地だつてあるはずだ。ならば作つたらいいじゃないかと思つている。なぜならば我々が出口を作ればいいんだから。それをあえて生産抑制する必要なんてない。確かに政策などの政治の力が必要な分野でもあるが、どうせやるなら農業が続くようなやり方をさせたい。輸出用米の産地を作るとか、飼料用米の産地を作るとか、政府備蓄米にするとか、産地の住み分けはできるはずだ。全国一律にどこでもブランド米を作りたいというのは将来は無い。

小泉 仮に来年秋田のブランド米が特Aで出ましたと。新潟の新之助や熊本の本の森のくまさんのように。残念ながらも驚かない。ああ、また新しいの出たんだ。その程度。全然訴求力無いですよ。正直、こんなに全国各地にブラン



ド米がある中で、このブランド米じゃなかったら俺は絶対米喰わなйтかなりますか？なりませんよね。

小田嶋 性能のいい炊飯器で炊いたらほとんど違いなんてわからない。

小泉 ほら、米を作っている人がそう言ってるんだから。

小田嶋 俺が言ってるんだから間違いない。

小泉 これは絶対に一般では放映されないけどさ、本当にそうなんだよ。

小田嶋 生協のお母さん方と話す機会があつた時に、俺はよほどまづい米じゃない限り違いが判らないと言つたら、「安心しました、私もそうです」って言っていた。需給の総量のミスマッチなんて本当は問題じゃない。生産者は作れ

る田んぼが限られているから単価の高い方に行こうとする。ここが問題。

小泉 あとは自分の所のブランド米を出して認められたいという県の試験場のエゴもあるでしょうね。

小田嶋 実際の需要に応じた作り方をするとしたら、鉄板のブランド米を持っていないところは独自の戦略を取っていく必要があるはず。

御法川 それこそブランドや組合の名前を出さなくても売ればよいんだから。

小田嶋 売り先としっかり協議してね。全国一律で同じことをやろうとするから訳が分からなくなっている。

※3 入管法
出入国管理及び難民認定法の略。



※4 GAP
Good Agricultural Practice の略。適正農業規範、農業生産工程管理とも。農業においてある一定の成果を得ることを目的として、実施すべき手法や手順などをまとめた規範、またはそれが適正に運用されていることを審査・認証する仕組みのこと。

※5 JGAP
JはJapan、日本。日本GAP協会が日本国内の統一基準を確立する目的で2005年にスタートさせたGAP制度。

※6 グローバルGAP
事実上の世界基準となっているGAP制度。

※7 アジアGAP
アジア共通のGAP制度。

復田を進めた結果が、今

小泉 僕の地元の米卸が今一番力を入れているのは米ではなく、米のグラノーラなんです。僕は朝にグラノーラを食べる機会が多いんですよ。結婚するとグラノーラは食べないですか？

御法川 朝はごはんだね。女房がごはん好きで毎朝炊き立てを食べさせてくれる。グラノーラなんか健康食品としての位置付けがで

きるわけ？

小泉 小麦のシリアルと違って、米のグラノーラはグルテンフリーなんですよ。小麦アレルギーの人でも大丈夫。今、朝はパン食という人ってかなり多いですよ。男女問わず朝が忙しい。そんな時に牛乳注いですぐに食べられる。

御法川 秋田ではそういう取り組みを誰もやってないの？

小田嶋 特別やっていないが、雑穀は多いかな。

小泉 ホテルの朝食でも雑穀米や雑穀グラノーラを出しているところがありますよね。僕の地元のところではライスグラノーラという名前です。

小田嶋 うちの方の田んぼはまだ主食用の米としての引き合いが強くて、田んぼが足りていない状況なんだ。

御法川 まだ足りてないんだ？

小田嶋 足りてないなあ。もうちょっと主食用米を作っても大丈夫。

御法川 秋田はね、減反辞めると最初言ったときに俺はチャンスだと思った。米でいける地域だから。米の作付面積なんだけど、東日本で一番増えているのが秋田なんです。5500鈔増えた。これはすごいよ。

小泉 増産の方向に舵を切ったんですね。

御法川 要は米がちゃんと売れさえすればいくら作ったっていいんだから。

小田嶋 平成24年に秋田県が本格的に政府備蓄米に取り組んだ時、うちの方では景観を維持するために復田を勧めた。エン麦播いただけのような田んぼや、ろくに取れない小麦畑を田んぼに戻していった。東日本大震災の後、県間調整によって一時的に秋田県の生産数量目標が増えた。それに真面目に取り組んで、政府備蓄米も復田させてまで取り組んで今の面積ができた。水田フル活用の政策が始まった時に、うちの農協は補助金を貰うのではなく「とにかく田んぼに戻すんだ」といって平成24年に今の面積が出来上がった。

御法川 なるほどな。

小田嶋 今の今復田した訳ではなくて政府備蓄米に一生懸命取り組んだ結果だ。

御法川 なるほどね。当時は専務か。

小田嶋 専務の時。値段は安いけど、政府備蓄米も売り先の一つだから復田しよう。

今後はいかに米の値段を作況に大きく左右されないように安定させるか、というところに主眼を置いている。もちろん作柄をぶれさせない事も大事だが、作況であまりにも値段が変動するような流通の仕方を作ってはダメだ。そのためには政府備蓄米の入札は最終なんだ。それまでに売り先見つけておけば、そんなに値段が下がる事なんてありえないはず。それに売る人が卸を売り先だと思ってるから話が混乱する。さらに先、最終消費先の店と契約できますかという話だ。それがなかなか浸透しないから今騒いでる人たちがいる。

楽しく食べる

小田嶋 基本的に政官業っているいろんな業界にあることだが、第三者の目って絶対いつかは入れなきゃいけないよなと思ってる。中にいる側はそれが当たり前だと思ってる。他から見たらすごく変な事をしてる可能性もある。

御法川 そう。それをこじ開けたのが農業なわけ。小泉進次郎が。次は医療の分野になるだろうね。

小泉 できたら大きいですよ。農林部会長と厚生労働部会長をやって共通するのは、健康というキーワード。食。食は健康の源じゃないですか。

小田嶋 俺の親父みたいなことを言い始めたな(笑)。

小泉 食ってすごく大事で、今人生100年時代だから、いかに幸せに長く生きるかと考えたなら、いかに美味しく、食べ物を自分の歯で食べられるかなんですよ。そう考えると医療と食は直結していると感じていて、この分野はもつと出来る事があると思います。8020運動ってありますよね。僕は今、これからは10020運動だと。100歳まで自分の歯20本を維持しようって。自分の歯で食べなくなったら、途端に食べた

くなくなりすよ。

小田嶋 作る側も楽しんで食べてもらいたいと思ってる。米でも野菜でも。そしてほどほどの価格であればいいと思ってる。あまり法外に安くならなければいい。その代わり、きちんと消費者が喜んでくれるように作っていく。それでうちではどれだけ成果があるかはわからないが、使用する農薬を半減するっていう、特別それ自体がお金にはならないような方法を10年位前からやっている。見た目も美味しそうなのはいいというから、振るい目を大きくしてみたり、お客さんが欲しいと思えるようなことを一生懸命やってきている。やっぱり楽しく食ってもらえるのが一番。野菜でもなんでもね。

女性の力

御法川 小田嶋組合長の家ではたばこの葉っぱもまだ作っている。

頑張っているのは全部奥さんだけだ。

小田嶋 バレたか(笑)。農家の代表のような顔をして、実は家族の労働に頼り切っている。

小泉 農協の総代会にももつと女性が出てくるべきですよ。どうしても男性がメインになりがちだが出でてきて声を上げてほしい。

御法川 女性部はすげー元気だもね。

小泉 そう。女性部は元気。だって運動会をやっているのは女性部だけなんだから。男性は絶対スポーツ大会やらないよね。

小田嶋 男は何かをやるうとする、そうやっても難しいとか、こんなことはやらない方がいいとか言う。健康にも女性は一番気を使っている。常に意識が高い。

しっかりと後押しする

御法川 激論を交わしてきましたけどね、小泉先生には以前農林部会長として農政改革やらいろいろ取り組んでもらって。今は厚生労働部会長として頑張ってもらっているけれども、農業と健康は繋がっていると。食という部分で今後も引き続き小泉先生には見てもらいたい。

小田嶋 これからの農産物の必須要件は健康につながっていくと。値段じゃないよと。安心、安全の先には国民の健康があるんだ。

小泉 今若い人たちが人生100年時代になって、農業に目を向けてくれている。農家の皆さんって定年が無いじゃないですか。これはね、先取り業界ですよ。いろんな業種でももちろんJAでも定年があるでしょ。海外に目を向けると定年の無い国がほとんど。日本は数少ない定年のある国。こ

特別対談

小泉進次郎 × 小田嶋契

れからまさに定年の無い時代に向かつていく中では農家の皆さんは時代の先取りだと思って、健康で生き生きと、そして国民のみならず世界中の人たちが「日本のおいしいもの」を求めている。おいしいものを生み出して、なおかつ定年無く働ける。あと足りないのはそこに稼げるという点。これさえ確立できれば、今一番いい業界ですよ。

小田嶋 年いった人は年いった人なりに農業の楽しみ方をもともと持っているはず。問題はそれでどうやって飯を食っていくのか。その後押し。農家が工夫して頑張っていることを、行政と農協が後押ししてきた。農協が先頭になって旗降ってやってきたことで上手くいった例なんてほとんどない。

御法川 それは行政でも同じだね。

小泉 一番いいのは民間先行行政後方支援型ですね。

小田嶋 行政や農協が主導してという話ではない。売り先でも作り方でも作るものでも。世の中が変わったと感じるのは、やる気のあがる若い人が農業に関心を持ち始めている。私のように、跡取りだからしようがなくやるんじゃなくて、農業面白そうだなって思う人たちが増えてきているのはこれまでに無かった話だ。日本の長い農業の歴史の中では、ほとんどがやらなきゃいけないとやってきた。今はやってみたいと思う人がいる。我々の役割は、それをしっかりと後押ししていくことだ――。





JA秋田ふるさと

2 0 1 9 年 も

よ ろ し く

お 願 い し ま す

秋田ふるさと農業協同組合

〒013-0036 秋田県横手市駅前町6番22号

TEL / 0182-35-2630

FAX / 0182-35-2701

E-mail / fu.staff@akita-furusato.or.jp

検索サイトでJAのホームページに簡単にアクセス!